第2話：どっしり王、ぽーちゃんの静かな観察力（そして敏捷な逃げ足）

朝の支度でバタバタしている私の背後から、「じーっ」と感じる視線。
振り返ると、ぽーちゃんが仏像のようにどっしりと座り、こちらを見つめていた。

白と灰のハチワレ模様がきっちり整ったその顔は、まるで大日如来のような貫禄。
我が家の"大黒柱"——そう呼びたくなる落ち着きが、ぽーちゃんにはある。

けれど、その「王のような静けさ」は、実は一面にすぎない。
彼はとても繊細で、警戒心も強い。
物音がすれば誰よりも早く隠れ、だっこもあまり得意ではない。
なでなでも、へそ天でごろんとしながら「してもよいよ」と態度で示すくせに、ほんの少しで「もういいにゃ」と立ち去る。

そんなツンデレぶりにも、私は日々ほほえんでしまう。
動作法でいえば、ぽーちゃんは「静的調整」の名人であると同時に、身体の微細な変化を察知してすぐに反応する「動的センサー」でもある。
動かず、構えず、ただ"そこにいる"ことの力。
そして、自分の心地よさのラインを正確に守る力。

彼の態度はいつもニュアンスに満ちている。
私やビオラちゃんには、甘えるように身体をあずけてくるのに、アビイちゃんには意外なほど厳しい視線を向けることもある。
「わたしの領域を、侵しすぎにゃいでね」——そんな空気をまといながら。

でもあるとき、私が疲れて帰宅した夜、ぽーちゃんはふらりとやってきて、何も言わずに足元で寝転がった。
ひとこともなく、それでも明らかに「だいじょうぶかにゃ」と言ってくれている気がした。

動作法のセッションでも、言葉より先に「気配」や「身ぶり」が語るときがある。
ぽーちゃんは、まさにそんな存在。

今日も私は、彼から「からだで語ること」の深さを教わっている。